

二〇二四年度 第一回 入学試験問題

国語 (50分)

〈注意〉

- (一) 開始のチャイムが鳴るまで、この冊子を開いてはいけません。
- (二) 問題は1ページから29ページに印刷されています。
- (三) 受験番号と氏名は解答用紙の定められたところに記入しなさい。
- (四) 解答はすべて解答用紙の定められたところに記入しなさい。

受験番号		



I 次の文章を読んで、以下の設問に答えなさい。

慎はシングルマザーの母と暮らしている。母には慎一という恋人がいたが、先日二人で北海道旅行に行つて車が横転する事故にあつて以来、家を訪ねてくることもなくなった。ある日、祖母が交通事故にあつて救急搬送された。その頃、慎は5時間目の体育の授業中で、給食の時間に食べたものを吐いてしまった。教師が急いで早退し病院に向かうよう促したため、慎は吐いたものの後始末をできず、結果として慎が予期していたとおりにいじめが始まった。一方、祖母は交通事故後に帰らぬ人となつてしまった。

ある放課後、C棟の脇の梯子に登れと命令された。自分の住まいの側までいじめが迫ってきたのは生々しい恐怖だった。慎は数人に取り囲まれた。誰かの兄か、中学生も一人二人混じっていた。皆、なにおかしいのかにやにやしていた。梯子にのぼつて、上の方のゴシック体のCの脇に「astle Hotel」を書き足せというのだった。

「おまえの親はそこが好きなんだからちようどいいだろう」といわれ、慎は怒りを飲み込んだ。自分のことなら脅えるだけだだったが母のことを揶揄されるのは悔しい。

にらみ返すと「なんだよ」やるのか」と四方から小突かれはじめた。仕方なく背伸びしてやつとのことだ梯子の一番下にとりついた。皆が取り囲み、その背後を彼らの乗ってきた自転車が囲んでいた。

慎はぶらさがつたままはやされつづけた。梯子の先には、かすかに屋根のでっぱりと、あとはいつもの曇り空がみえる。しばらくぶらさがつて皆が飽きるのを待つほかない。

実際、慎の様子にあきてしまうと中学生の一人が慎を引っ張りおろした。そのままAと突き飛ばすと「貸せよ」といつて慎から極太字のサインペンを奪い取つた。それからBと梯子にとりついた。本当は最初から自分が登りたかつたのだ。

皆、揃つて真上をみあげた。中学生は、ひよーつと奇声をあげながらどンドン登つていく。ヘンセイキの途中みたいで、とき

どき叫び声がかすれている。梯子の終わり、Cの真下に来ると片手で梯子を掴み、口でサインペンのキャップをハズした。

「こえーよ」と叫んだが、その声には笑いが混じっている。サインペンのキャップが落ちてきたが地上の皆は安心しきっていた。キャップは皆の背後のアスファルトにCとあたって大きくバウンドした。全員振り返ったが見失ってしまった。皆、上のほうが気になってすぐに視線を戻した。Cの字の大きさに比べて中学生の書き足した文字は小さすぎた。かすかな黒い染みにしかみえなかった。

もつと大きく書け、と下から声が飛んだが中学生は降り始めた。しかしキャップを落としたときに下をみたせいか、降りる足取りは登るときよりもかなり慎重になっている。

「足、震えてんぞ」下から別の中学生が叫んだ。

「おまえの名前も書いておいてやったからな」降りてきた中学生は恐怖をごまかすようにいうと、サインペンを慎に投げた。全員満足したらしく、いっせいに自転車に乗ると元気よく帰っていった。慎はもう一度上を見上げたがしみが読みとれないことで気持ちを納得させた。

葬式が終わりしばらくすると祖父がシンロウで倒れてしまった。カンビヨウのため母はS市の実家からM市の勤め先に通うことにした。団地に一人で寝泊まりさせるわけにはいかないと、慎もS市から車で登校することになった。朝五時に起きる生活はじまった。

床に就いた祖父はすまないな、とだけいった。

①「全然、大丈夫」と母はいったが祖父は言葉の間違いを訂正することもなく目をつぶった。

母は毎日往復三時間の移動でD疲労していった。電車賃がかかるので、慎は夕方から夜までを団地で過ごし、晩御飯は実家で夜遅く食べる。しかも月に二度ほど、母は職場に早朝出勤しなければならなかった。その日は午前四時過ぎに家を出て車内でパンを食べる。

まだ真つ暗なうちに団地に着くと、駐車場に入る途中で須藤君の姿をみた。朝練に向かう途中のようだ。今、慎がいじめられていることは体育の合同授業で一緒になるから、多分知っている。自分一人がかばっても何も変わらないだろうということも分かっているようだ。

須藤君は車内の慎には気付かず、野球道具の入った袋を背負いながら黙々と歩いて行く。須藤君と野球という組み合わせは今でも **E** 感じるが「誰とでも仲良くしろ」という親の言葉にすこぶる素直だったことを思えば、運動に關しても親の **E** イコウがあつて、須藤君はそれに従っているだけのことかもしれない。慎は遠ざかる須藤君の背中をそつと見送った。

母は霊柩車に乗り込んだときのやつれた表情がそのまま張りついてしまったようだ。慎は息詰まる思いだった。

祖父の家では **F** 使わなくなっていた古いトースターから黒焦げになったパンが飛び出してきたとき、母はそれでも構わないからと手を伸ばすと「ばかっ」と怒鳴った。それから自分がそういわれたみたいになつてうつつむいた。

朝早くS市を出ても国道の手前の踏切によく捕まった。早朝は貨物列車のラッシュだった。左からの列車が行き過ぎてもすぐに右からやつてくる。どの列車もひどく速度が遅い。母は苛々してハンドルを叩いたりしたが、時折、牛を満載した車両がゆつくり通り過ぎると我にかえつたように慎の方を向いた。少し笑っているようにもみえる。牛は顔の先を貨車からわずかに覗かせて、二人の乗った車を見おろした。慎は母の機嫌が少しでもよくなるように毎朝牛の登場を渴望した。踏切の警笛の鳴り響く中を牛が横切るとき慎は本当に救われたような心持ちになつた。

ある朝珍しく母の機嫌がよかつた。前日から祖父の状態もよく、踏切にも捕まらず、早朝のラジオの流した一曲目が母の気に入っているらしいものだった。

「ビートルズの『シーズリービングホーム』っていう曲」尋ねないのに教えてくれた。

「私も武道館にいきたかつたけど、いけなかつたんだ」といった。学校のL教室で音楽の授業で聴いた陽気なビートルズと趣がずいぶん違う。道はすいている。車は時速百キロ以上出している。慎は心が軽くなつてしまい、ついいつた。

「こないだ病院で、慎一さんにあったよ」

「こないだって、いつ」母は驚いた様子だ。慎は最初から説明しなければいけなくなった。水の流れるトイレでの出会いから、交わした会話まで。すべて明るく喋ったあとで、母の気配が一変していることに気付いた。

それでも慎は、その話を今までしなかったことで怒っているのだと考えた。

「葬式とかで、忙しかったから、いえなくて」ごめんなさいと付け加えたが、母はわかったとだけいって黙り込んでしまった。

「そんなこと、子供にいうかね。しっかし」やがて母は滅多にみせない北海道訛りを出していった。

（お母さんがうろたえている！）慎は母の横顔をみつめてしまった。すぐに睨みかえされた。なにかいわれるかと思ったが母は無言のままだ。

車の中は鉛に満たされたようになった。口にしたのは慎一への怒りだったが、母は目の前の慎に腹を立てているように思えた。実際、慎は自分が軽率なことをしたという気がした。

このときまで慎は母が慎一をふつたのだとばかり思っていた。これまでがそうだったからだ。しかし、これまでがそうだったというのも思いこみではないのか。慎は急に思いついた。母の恋愛がうまくいかないとしたらその原因は自分の存在にあるのかもしれない。なぜ今まで考え付かなかったのだろう。重苦しい雰囲気の中で窓の外ばかりみた。

母が帰ってこなかった夜を思い出す。母がああ夜、慎一と二人でいなくなってしまうても自分は納得していたのだと心の中で考えた。自分が一瞬でもそう思ったことを母は知らない。<sup>④</sup> 慎は念力をおくるようにそのことばかり考えつづけた。

十一月のある日、慎は学校で数人から本をもってくるように命令された。昔、慎一がくれた手塚治虫のサイン本だ。貸せという話だったが多分返してはもらえないだろう。学校から帰宅すると忘れないように手提げにいれて、明朝団地に戻ってきたときすぐに手に取れるように玄関に置いた。

翌朝は月に二度の早出の日だった。二人は夜明け前にS市を出発した。団地についたのは午前六時をまわったところだった。慎

は母に起こされた。外はまだ夜の暗さだ。

二人ともうつかりしていた。母はC棟の前に停めて、キーをさしたまま車のドアを閉めてしまった。慎も家の鍵のついたキーホルダーを助手席においたままドアを閉めていた。⑤ 母は焦げたパンをみるような目でドアをみた。恐ろしい沈黙が続いた。

「手提げがないと学校にいけない」慎はおずおずと試みてみた。

H 「母は慎の方をみない。車の処置のことで頭がいっぱいようだ。

「でも」

「でもなに」慎の「でも」よりも速い言い方だった。

I

「書道の道具」慎は嘘をついた。

J

「でも」

「でも、いったいなんなのさ」母の苛立ちはどんどん高まっていた。

K 「慎は黙った。母は自分の家のベランダのあたりを見上げた。

霧が出てきた。霧は土手の向こうからきて、団地全体を包み始めている。

「わかった、もう」と母はいった。なにをどうわかったのか、母は慎を押しつけるようにして歩き出した。団地の側面まで行くと梯子に手をかけた。そのままを見上げている。夜が明けつつあった。慎が追いつくと

「誰かこないか見張って」といって母はブーツを脱いだ。でも、という言葉の飲み込んだ。さつきから何度「でも」をいっただろう。何を思ったか母はストッキングも脱いで裸足になった。コートのボタンもはずすと慎が驚いているのも構わずに梯子を登り始めた。

母はどんどん登っていった。中学生の「こえーよ」という叫び声。四階から落ちた女の子。Cの横のくだらない落書き。ジャッ

キを回す母の手。慎はなにもいうことが出来ずに立っていた。足下にはたった今脱いだブーツとストッキングがある。ブーツは去年の冬に買ったものだ。ストッキングはブーツの上に丸めて置いてある。ずっと昔にも似た光景をみたことを思い出した。ガソリンスタンドから帰ってきた母が風呂に入るときにも、こんなふうに脱いで丸めて床に置いていた。制服はズボンだったからストッキングは冬場の防寒のつもりだったのだろう。今もあのときと同じように、まるで無造作にそれは置かれている。

霧が母を包み始めた。かすんではいるが、母が登っていくのはみえた。周囲は明るくなってきている。母はやみくもに登り続けたわけではなかった。

「今、四階？」朝露を含んだ空気が母の声をかすかにこだまさせた。慎はまだ母がなにをしようとしているのか飲み込めていなかった。

「四階だよね」母は慎の返事を待っていないかった。母はちゃんと横をみて確認しながら登っていたのだ。

母は梯子の左端に寄ると、左手を端の家のベランダの手すりに伸ばしはじめた。届かないと分かると、今度は左足も大きく宙に踏みだした。右手右足を梯子に残したまま、体を思い切り伸ばす……と左手が手すりにかかった。

慎はあわてて周囲を見渡した。ウインドブレーカーを着た男が不意に団地の脇から現れた。C棟の脇を巻くようにして、慎には一瞥もくれずに走り去っていった。慌てて慎は上をみた。母も動作をとめ、鋭い目つきでウインドブレーカーの男をみつめている。母は再び手を伸ばした。霧は土手の向こうから広がってきている。さらに濃くなるだろう。

慎の体はすくみっぱなしだった。母の左足のつま先が、端の家のベランダのでっぱりにかかり、左手が鉄柵をつかむと母はためらわずに重心を移動させた。右手と右足をベランダの方に移す。

本当なら今度はベランダの向こう、室内の人影も見張らなくてはならなかった。B棟の窓から覗く人もいるかもしれない。どこかの部屋のカーテンが不意にさつと開くのではないか。しかし慎はなにもしなかった。呆然としていた。この軽業が途中で見とがめられるなどということは想像できなかった。母は足と手を動かして各戸を移っていった。

たとえ四号室まで辿り着いたとして、窓の鍵は開いていただろうか。霧が慎の視界を奪った。やがて母の姿はまったく見えなく

なつてしまった。それでも慎は上をみあげたが、心がざわつきはじめた。濃い霧に包まれると、狭せまいような広いような気持ちになると母はいつていた。暗示にかけられたように、慎も同じような気持ちになった。

母は自分の家に入ろうとしている。だが慎は母がこれからどこかに消え去ってしまうような気がする。

「どこにいるの」と声がしたとき、まだ慎は何もみえない上空をみあげていた。誰⑥に呼ばれたかも一瞬分からなかった。

「慎」母が自分の名前を呼んでいる。近くか遠くか、上からなのか横からなのかも分からない。返事をしようとしたら口の中が乾かわききつていることに気付いた。慎も霧の中にいた。慎の名を呼ぶ声が団地の間をかすかに反響はんきやうしている。ずいぶん長い間、慎という名前を呼ばれていなかったような気がする。声の方向がだんだん定まってくる。小走りせうしりで近づいた。

突然とつぜん目の前に姿をあらわした母に慎はぶつかりそうになった。お互たがい少し驚いて、顔を見あわせた。母はだらんと下げた手に手提げ袋てびくろとキーホルダーを持っている。

母はほら、といつて手提げを手渡した。書道の道具の入っていないことは明らかだが、なにもいわない。母がストッキングをはきおえたとき「おはようございます」と声がした。二人振り向くと、須藤君が立っていた。

「おはよう。すごい霧だね」母は会釈えいせきをかえした。いつもの母ならおはようしかいわないだろう。

久しぶりに慎は須藤君と歩いた。寒いねという須藤君に相槌あいちをうったが、体はまだ少し亢奮こうふんで火照ほてっている。くらくらとめまいもする。

須藤君はなにもいわなかった。続いている慎へのいじめのことも、アパート脇そばに揃そろえられていた母のブーツのことも。霧は晴れてきた。それでも街は曇くもっていた。

「今日も朝練？」慎はきいてみた。

「うん。もうすこししたら屋内練習になるけど、今が一番寒いよ」須藤君は気弱そうにいったが、それでも久しぶりに改めてじっくりみると須藤君の肉体はがっしりと引き締まり、背もずいぶん高くなっている。

「でも、少し前からスパイク履かせてもらえるようになったんだ」というと、袋から黒いスパイクシューズを取り出した。そして靴底を上にしてスパイクをみせてくれた。

「いいでしょう」試合は補欠だけど、とそのことはどうでもいいことのように付け足した。それから不意に立ち止まった。

「最近、あまり夜中に鳴かないよね」と須藤君はいった。水族館のプールの前だ。今は結婚してつがいになったトドを二人で眺めた。須藤君もトドの声を気にかけていたのを六年間、知らずにいた。

しばらく二人は立っていた。須藤君は慎の横顔を何度かのぞきこんだ。

「なんで泣いているの」須藤君はいつもより困った口調でいった。

⑦ 慎は上着の裾で顔をぬぐうと「これ預かってくれない」といって手塚治虫の本を手提げごと須藤君に渡した。

慎はときどきだが再び須藤君と一緒に登校するようになった。自分からいろいろ話すようになった。母も新しい生活のリズムに慣れてきたようだった。祖父もだんだん回復して、車の運転もして詩吟の集いにも出かけるようになった。

ある朝S市から国道に入るT字路で赤信号になった。

「そういえばどうでもいいけど」母は停車すると煙草に火をつけてからいった。

「あんだ、キャツスルのスペル間違ってるよ」C・A・S・T・L・Eだよ。CASSLEじゃないよ。

「僕が書いたんじゃない」中学生がやってきて、僕の名前で勝手に書いたんだ。正直にいつてみると、それはなんでもないことだった。

「馬鹿が多いんだね」母は眉間に皺を寄せて、煙草をふかした。

「おじいちゃんずっと一人暮らしたと寂しいから、私たちが引越しをしなきゃ」

「うん。いいよ」

「今度の学校も馬鹿がいらないとは限らないよ」母はすでに吸殻でいっぱいのは灰皿に煙草を無理矢理押し込んだ。

「平気だよ」自分でも意外なほどきっぱりとした言い方になった。母は慎の横顔をみつめた。

左手の方で信号待ちをしている車がワーゲンだった。

「こんな朝に」母は、つぶや呟いた。

国道側が青に変わり最初のワーゲンが行くと次もワーゲンだった。道の左手には大きな家具屋の店舗てんぽがあつてみえなかったが、つづく三台目もワーゲンだった。

「すごい」慎はいった。

「次もだ」母の声もうわずついていた。

どこかで見本市でもあつたのか、これからあるのか、どれも真新しい色とりどりのワーゲンが数珠じゆずのようにつづいた。二人は声を揃えてワーゲンを数えた。全部で十台が通り抜け終わると計ったように信号が切り替かわった。

二人の乗ったシビックはワーゲンに先導される形で早朝の国道を走った。慎は母が喜ぶと思いい自分も嬉うれしくなった。しかし見通しのよい上り坂になって前方をワーゲンばかりが行進するのを見てうちに母は急になにかがこみあげてきたみたいになった。母はまた煙草をくわえ火をつけると、アクセルを思い切り踏ふみ込んだ。

追おい越し車線に入つて数台抜いたところでトンネルに入った。母はさらに加速させた。キンコン、キンコンとスピードの出しすぎを警告するチャイムが鳴った。

トンネルを抜けるころには十台のワーゲンをすべて追いついて先導する形になった。母は満足そうにバックミラーを覗いた。やっと少し速度をゆるめたが、ワーゲンの列はどんどん遠のいた。

根元まで吸った煙草を捨てようとしたが、灰皿にはもう押し込めそうもない。母は慎に短くなった煙草を手渡した。

「そこから捨てて」という。まだ先端せんたんの赤く灯る煙草を受け取った慎は、あわてて空いている方の手で窓を開けた。左手の海岸に向けて慎はそれを放った。煙草はガードレールの向こうのテトラポッドの合間に消えた。

【問1】

|| a) e) のカタカナを漢字に改めなさい (楷書で、ていねいに書くこと)。

① ヘンセイキ

② ハズ

③ シンロウ

④ カンビョウ

⑤ イコウ

【問2】

A

C

に当てはまる語を次の中からそれぞれ選び、(ア)～(オ)の記号で答えなさい。

(ア) どん

(イ) ぎくつ

(ウ) かつん

(エ) ぴよん

(オ) ひたひた

【問3】

——①「全然、大丈夫」と母はいつたが祖父は言葉の間違いを訂正することもなく目をつぶった」とありますが、「言葉の間違い」について説明した次の文章を読んで、a d に当てはまるものをそれぞれ選び、(ア)～(ク)の記号で答えなさい。ただし、同じ記号を2度以上用いてはいけません。

祖父は、日頃から慎の母のいい加減な言葉遣いを注意する人物でした。今回も「全然、大丈夫」という母の言葉遣いに目くじらを立てそうなものの、祖母の死後に体も弱り、母の世話にもなっているので、注意するには至らなかつたようです。この部分からは、「全然、大丈夫」という母の言葉遣いは「間違い」という前提があることがわかります。明治時代にさかのぼると、「僕は全然恋の奴隷だった」のように、「全然」の後ろにa 表現をとまなう使い方も、「全然おもしろくない」のように、「全然」の後ろにb 表現をとまなう使い方もあつたようです。いずれの使い方によせよ、ある状態をc 表現として使われていました。一方、ある時期からは、b 表現との結びつきが強まり、「全然」は「くない」のような表現とともに用いることが「正しい」とされるようになりました。しかし、近年では「全然、すごいよ」のように、a 表現をc 意味で使用される例が、再び増えてきました。慎の母親が使う「全然」は、この意味のものだと言えます。母親は、祖父のような世代の人にとっては「間違い」と思われてもおかしくない形で、「全然」という言葉をd のです。このように、言葉は時代によってその使われ方が変化するので、「間違い」と決めつける前に一度立ち止まってみる必要があるのではないのでしょうか。

- |          |          |
|----------|----------|
| (ア) 仮定する | (イ) 否定する |
| (カ) 想像する | (ク) 命令する |
| (キ) 肯定する | (エ) 強調する |
| (コ) 創造する | (オ) 運用する |

【問4】

D

G

に当てはまる語を次の中からそれぞれ選び、(ア)～(カ)の記号で答えなさい。ただし、同じ記号を2度以上用いてはいけません。

- (ア) 徐々じょじょに (イ) 一概いちがいに (ウ) 滅多めったに  
(エ) 乱暴らんぼうに (オ) 偶然ぐうぜんに (カ) 意外いがいに

【問5】

②「それから自分がそういわれたみたいになつてしまった」とありますが、この部分の説明として最も適当なものを次の中から選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

- (ア) 慎は、祖母の死を受けていらだつ母親をなぐさめたいと思い黒焦げのパンを捨てたが、怒鳴どなった直後にすぐ気落ちする母親の感情の起伏きふくの激しさに直面して戸惑とまどってしまった。  
(イ) 母は、朝の忙しい時間にもかかわらずパンを黒焦げにしてしまったことにいらだつて怒鳴どなったが、慎は、母親の怒りを自分に対する怒りだと勘違かんちがいして、自分自身を責めている。  
(ウ) 慎は、パンを捨てて皿に戻そうと思つた途端とたんに、母親に怒鳴られたので驚いたが、怒鳴った母親の方は自分の怒鳴り声が祖父に聞こえて叱しかられるのではないかと焦あせってしまった。  
(エ) 母は、いろいろなことがうまく運ばない現実げんじつにいらだつて思わず慎を怒鳴ったが、自分と同じように大変な状況じやうきやうにある慎に八つ当たりをしてしまったことで、少し落ち込んでいます。

【問6】

③「踏切ふみきりの警笛なの鳴り響ひびく中を牛が横切るとき慎は本当に救われたような心持ちになった」とありますが、なぜですか。理由として最も適当なものを次の中から選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

- (ア) 張りつめた空気がただよう中、車両に押し込まれた牛たちが穏やかな表情で踏切を通り過ぎるのを見るたびに、慎も穏やかな気持ちになることができ、とてもありがたかったから。

(イ) 渋滞中のドライバーがいらだつ中で、場違いな牛の登場とのんびりとした牛の様子を見て母は満面の笑みになり、その笑みにつられて慎も笑顔になったことをありがたく思ったから。

(ウ) いらだってはいるが、牛を積み込んだ車両が通り過ぎさえすれば踏切が開くことがわかっており、母は牛を見ると自然と表情をゆるめるので、慎は牛の登場をありがたく思ったから。

(エ) いらいらが高まる状況の中、その場に似つかわしくない牛を満載した車両がゆっくり通り過ぎることで、慎は母の様子が少し穏やかになったように感じ、とてもありがたく思ったから。

## 【問7】

——④「慎は念力をおくるようにそのことばかり考えつづけた」とありますが、ここでの慎の気持ちを言い表したもののとして、最も適当なものを次の中から選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

(ア) 恋人を作る上では、僕の存在が足かせになっていることに母は気づいていない。二人がよりを戻すには僕を捨てる勇氣が必要だ。

(イ) 二人が旅行に行った時から僕は捨てられる覚悟はできていた。でも、そのことを伝えたら、本当に捨てられるのではないだろうか。

(ウ) 母が僕より恋人を優先したって構わないと思っていた。そのことを母に直接伝える勇氣はないが、いつかどこかで気づいてほしい。

(エ) 母は恋人とうまくいかなかったけど、二人の関係にはなにも問題はなかった。僕のような難しい年頃の息子がいることが問題なんだ。

【問8】

——⑤「母は焦げたパンをみるような目でドアをみた」とありますが、ここでの母の様子について説明したものと、最も適当なものを次の中から選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

- (ア) 思うようにいかないことが連続する中、自らもミスをしてしまい、言葉を失っている。
- (イ) 現実には起こりえないはずの光景を目の前にして、ひどく驚き、ぼうぜんとしている。
- (ウ) 焦げたトーストにいらだったかつての朝を思い出し、再度ミスをしたことに取り乱している。
- (エ) 恋人とうまくいけなくなった日のことをふと思い出して、うんざりした気持ちになっている。

【問9】

【H】～【K】に当てはまる会話文を次の中からそれぞれ選び、(ア)～(オ)の記号で答えなさい。

- (ア) 須藤君にはいつ手提げを渡すの？
- (イ) 事情を先生にあって、友達に借りなさい
- (ウ) 手提げに大事なものでも入っていたのかい？
- (エ) 今日はもう仕方ないから、そのまま学校にいきなさい
- (オ) この状況が分からないの。どうしたらいいっていうわけ

【問10】

——⑥「誰に呼ばれたかも、一瞬分からなかった」とありますが、ここでの慎の気持ちについて説明した次の文章を読み、(1)～(4)について適当なものを選び、それぞれ記号で答えなさい。

冬の早朝に母親が裸足で団地の梯子を登るといふ姿を見て、慎は母に驚きつつも心配しながら、この団地に関する様々な記憶を呼び起こします。慎に嫌がらせをするために梯子に登った中学生、かつてこの団地の四階から落ちて死亡したという女の子。慎はこれらの記憶とともに普段の母の様子を思い出しながら、

(1)

- (ア) 昔の母はおだやかで優しくなつたことをなつかしく思い出しています
- (イ) 無造作に置かれた母のストッキングを見て不安な気持ちになります
- (ウ) 母が行おうとしていることの意図を今ひとつ理解できません

。母が四階にたどりついた

当初は、慎は周囲を気にしていました。しかし、母が各戸のベランダを移動し始めると、ただぼんやりと立ち尽くす

ばかりで、慎は、(2)

- (エ) 母の言いつけの真意をようやく理解したのです
- (オ) 母の姿が誰かに見つかるとは思わなくなります
- (カ) 母の奇怪な行動になげやりな気持ちになります

。そのうち、母の姿が濃い霧に

包まれて見えなくなっていくとともに、

(3)

- (キ) 母がふいに消えてしまうという思いにわけもなくとらわれるのです
- (ク) 自分自身もこのまま消えてしまうのではないかと不安になります
- (ケ) すべてが消えてなくなってしまうばいと思えるようになるのです

。その後、母は無事に慎の

もとに戻り、声をかけます。慎はその声を聞いて、(4)

- (コ) 母は自分を愛していたのだと確信するのです
- (サ) 自分自身を見失っていたことに気づくのです
- (シ) 母が生きていたことが信じられないのです

。

【問11】

——⑦「慎は上着の裾で顔をぬぐう」と『これ預かってくれない』といって手塚治虫の本を手提げごと須藤君に渡した」とありますが、この時の慎について説明した次の文章を読み、(1)～(4)について適当なものを選び、それぞれ記号で答えなさい。

手塚治虫は戦後から昭和時代が終わる頃まで活躍した有名な漫画家です。当時の子どもたちにとって手塚治虫のサイン本は価値の高いものでした。十一月のある日、慎は「学校で数人から本をもつてくるように命令されます。この時の慎は、

- (1) (ア) 命令に従うことのためにためらいつつも、友達を喜ばせようとして学校にサイン本を持っていくのです  
 (イ) 母の恋人からももらったサイン本を早く手放したいと思い、ためらうことなく本を持参するのです  
 (ウ) 貸した本は返ってこないと予想しつつも、サイン本を持って行くことにはためらいがありません

- つまり、慎は、(2) (エ) 自分から現状を打破しようとは思っていません  
 (オ) 母が自分にもっと注目するよう策を練っています  
 (カ) 自分が我慢しても友達を喜ばせたいと思っています

- しかし、(3) (キ) 母が須藤君に話しかけたことで、慎は須藤君に心を許せるようになったのです  
 (ク) 母が自分の願いを聞き入れたことで、慎は母を信じられるようになったのです  
 (ケ) 母や須藤君との関わりを通して、慎は主体的に生きるきっかけをつかむのです

- 一歩が、(4) (コ) 「須藤君に手提げを預ける」こと、つまり「命令に従わないこと」  
 (サ) 「須藤君に話しかける」こと、つまり「新しい友だちをつくること」  
 (シ) 「慎」という母の呼びかけに応えること、つまり「母と会話すること」

に表れています。

【問12】

⑧「母は慎の横顔をみつめた」とありますが、この時の慎と母親について説明した次の文章を読み、aに当てはまる言葉をそれぞれ選び、(ア)～(サ)の記号で答えなさい。ただし、同じ記号を2度以上用いてはいけません。

落書きの文字は、中学生によって書かれたものだと思った母は、「馬鹿が多いんだね」と言いつつ引越しの提案をします。引越した先でも慎に対するいじめは起こるかもしれないことを母はそれとなく言いますが、このときの慎は、母にとってaをみせたと言えるでしょう。家族の死をきっかけにしたbの中で母が毎日を精一杯生きていたように、慎も日々を生き抜きながら少しずつ強くなっていたようです。慎は、母が危険を顧みず、手助けのためにペランダ伝いに家に入ったことや、須藤君が慎に対するいじめを知っていながらも普段どおりに接してくれたことをきっかけに、少しずつ他者に向かってcができるようになります。二人の気遣いに触れることで、慎は苦しい状況から回復しつつあるのです。

こうした慎を見て、母もまた変わっていきます。月に二度ほどある早朝出勤のため国道を車で走っていた時、慎と母は色とりどりのドイツ車が連なって走るといってdを目にします。かつて早朝の渋滞の中、母は開かずの踏切を前にしていらだちを爆発させ、慎はそれに戸惑うばかりでした。しかし、いま母はいらだつこともなく自分の車の前に連なるドイツ車を一気に抜き去り、eを覚えているようです。慎の変化を目にした母もまた、fができたといえるでしょう。

- |                  |                  |                  |
|------------------|------------------|------------------|
| (ア) 日常的な風景       | (イ) 不適切な振る舞い     | (ウ) めまぐるしい変化     |
| (エ) 充足感や爽快感      | (オ) めったにない光景     | (カ) 意外にも毅然とした態度  |
| (キ) 安定感や安堵感      | (ク) 自分らしさを取り戻すこと | (ケ) 自分の意志を表現すること |
| (コ) 恋人との仲を取り戻すこと | (サ) 反抗心を芽生えさせること |                  |

## II

次の文章を読んで、以下の設問に答えなさい。

### 1 ふしぎの体験

人間は毎日生活している間に、「あれ、ふしぎだな」と思うときがある。それにも大小さまざまがあり、ふしぎだと思いつつすぐ心から消えてしまうのと、**A** そのふしぎさを追究していきたくなるのと、相当に程度の差がある。

非常に簡単な例をあげよう。夜中にふと目を覚ますと、ブーンと変な小さい音が聞こえる。「あれ、ふしぎだな」と思う。それが気になって眠れない。**B** 起き出して、音を頼りに調べてみると、「なあーんだ、冷蔵庫の音だったのか」とわかって安心する。「ふしぎ」ということは、人間の心を平静にしておかない。「わかった」という解決の体験があつて平静に戻る。

電車に乗っていると、赤い帽子に赤い靴、鞆まで真赤という服装のおじさんが乗ってくる。「あれ、ふしぎな人」と思うが、おじさんがどこかで降りてしまうと、「変な人だったな」と思い、それで忘れてしまう。この際は、「わかった」というところはないが、「変な人」ということで、自分の人生にかかわりのない事柄として、心の中から排除してしまうことにより、心の平静をとり戻す。

**C** 平静をとり戻したのに、翌日まったく違うところで電車に乗っていると、また例のおじさんがやってきた。こうなるとそのままではおれない。「偶然だ」、「あんな服装流行しているのかな」、「あのおじさん、僕をつけているのかな、まさか」など心をはたらきはじめる。つまり、<sup>①</sup>人間というのは「ふしぎ」を「ふしぎ」のままでおいておけない。何とかして、それを「心に収めたい」と思う。

大人になって毎日同じようなことを繰り返していると、あまり「ふしぎ」なことはなくなってくる。何もかもわかったような気になる、今度は面白くなくなってきた、「ふしぎ」なことを提供してくれるテレビ番組や催しものなどを見る。これらは必ず「ふしぎ」なことが最後には心に収まるようになってるので、少しの間心をときめかして、後は安心、ということになる。

## あたりまえの事

「ふしぎ」の反対は「あたりまえ」である。大人は D 「あたりまえ」の世界に生きている。ところが、それを「あたりまえ」と思わない人がいる。

リンゴが木から落ちるのを見て、「ふしぎだな」と思った人がいる。この人はそれだけではなく、その「ふしぎ」を追究していつ、最後は「万有引力の法則」などという大変なことを見つけ出した。リンゴが木から落ちることは、それまで誰にとつても「あたりまえ」のことだったのに、ニュートンにとつては、それを「心に収める」のに大変な努力が必要だった。そして、彼の努力は人類全体に対する大きい貢献として認められた。

「人間は必ず死ぬ」。これもあたりまえのことである。しかし、これをあたりまえと思わず、「人間はなぜ死ぬのか」と考え続けた人がいる。釈迦牟尼は、それを心に収めるために、家族を棄て、財産も棄てて考え抜いた。彼の努力の結果、仏教という偉大な宗教が生まれてきた。これも人類に対する偉大な貢献となった。

このように考えると、<sup>②</sup> 「ふしぎ」と人間が感じるのには実に素晴らしいことだと思われる。特に他の人たちが「あたりまえ」と感じていることを「ふしぎ」と受けとめる人は、なかなか偉大である、と言えそうである。

こんな人はどうだろう。この人も「人間が死ぬ」という「ふしぎ」に心をとらわれた。それを解決しようとして、仏教やキリスト教や、あれこれの本を読んだ。しかし、どれも満足できないので、何かにつけ他人に問いかけるようになったし、この大きい「ふしぎ」に取りつかれているので他の仕事にあまり手がつかなくなった。そして残念ながら、この人は周囲の人たちに敬遠され、ますます孤独になって心の状態までおかしくなってきた。こうなると、<sup>③</sup> この人は「嫌われ者」になってくる。

「他の人はごまかして生きているのに、自分だけが考えるべきことを考えている」などというので、こんな人はますます嫌われる。それは「ふしぎ」を自分の力で心に収めることをしないでただけではなく、せっかく平安に生きている人の心を乱すので嫌がられるのである。「ふしぎ」と思ったからには、自分でそれを追究していく責任がある。

## 子どもとふしぎ

子どもの世界は「ふしぎ」に満ちている。小さい子どもは「なぜ」を連発して、大人に叱しかられたりする。しかし、大人にとってあたりまえのことは、子どもにとってすべて「ふしぎ」と言っているほどである。「雨はなぜ降るの」、「せみはなぜ鳴くの」、あるいは、少し手がこんできて、飛行機は飛んで行くうちにだんだん小さくなっていくけど、なかに乗っている人間はどうなるの、などというのもある。これらの「はてな」に対して、大人に答を聞いたり、自分なりに考えたりして、子どもは、自分の知識を貯たくわえ、人生観を築いていく。

六歳さいの子ども、おおたにまさひろ君の詩につきのようなものがある。<sup>④</sup>

おとうさんは

こめややのに

あさ パンをたべる

(灰谷健次郎編『児童詩集 たいようのおなら』サンリード、一九八〇年)

こんなのを見ると、「人間てふしぎなもんだな」と思ったりする。日常の「あたりまえ」の世界に、異なる角度から照らす光源ができて、それによって今まで見過ごしてきたことに注意を向けられたり、関心を寄せたりする。子どもの「ふしぎ」に対して、大人は時に簡単に答えられるけれど、一いっしょになつて「ふしぎだな」とやっていると、自分の生活がそれまでより豊かになつたり、面白くなつたりする。

## 2 ふしぎが物語を生む

### 納得なっくのいく答

子どもは「ふしぎ」と思う事に対して、大人から教えてもらうことによつて知識を吸収していくが、時に自分なりに「ふしぎ」な事に対して自分なりの説明を考えつくときもある。子どもが「なぜ」ときいたとき、すぐに答えず、「なぜでしょうね」と問い返すと、面白い答が子どもの側から出てくることもある。

「お母さん、せみはなぜミンミン鳴いてばかりいるの」と子どもがたずねる。

「なぜ、鳴いてるんでしょね」と母親が応じると、

⑤「お母さん、お母さんと言つて、せみが呼んでいるんだね」と子どもが答える。そして、自分の答に満足して再度質問しない。これは、子どもが自分で「説明」を考えたのだろうか。

それは単なる外的な「説明」だけではなく、何かあると「お母さん」と呼びたくなる自分の気持ちもそこに込められているのではなからうか。だからこそ、子どもは自分の答に「納得」したのではなからうか。そのときに、母親が「なぜって、せみはミンミンと鳴くのですよ」とか、「せみは鳴くのが仕事なのよ」とか、答えたとしても「納得」はしなかったであろう。たとい、せみの鳴き声はどうして出てくるかについて「正しい」知識を供給しても、同じことだったろう。そのときに、その子にとって納得のいく答というものがある。

「そのときに、その人にとって納得がいく」答は、「物語」になるのではなからうか。せみの声を聞いて、「せみがお母さん、お母さんと呼んでいる」というのは、すでに物語になっている。外的な現象と、子どもの心のなかに生じることがひとつになって、物語に結晶けっしょうしている。

### 物語のいと

人類は言語を用いはじめた最初から物語ることをはじめたのではないだろうか。短い言語でも、それは人間の体験した「ふしぎ」、「おどろき」などを心に収めるために用いられたであろう。

### E

かくて、各部族や民族は「いかにしてわれわれはここに存在するのか」という、人間にとって根本的な「ふしぎ」に答えるものとしての物語、すなわち神話をもつようになった。それは単に「ふしぎ」を説明するなどというのではなく、存在全体にかかわるものとして、その存在を深め、豊かにする役割をもつものであった。

ところが、そのような「神話」を現象の「説明」として見るとどうなるだろう。確かに英雄が夜ごとに怪物と戦い、それに勝利して朝になると立ち現われてくるという話は、ある程度、太陽についての「ふしぎ」を納得させてくれるが、そのすべての現象について説明するには都合が悪いことも明らかになってきた。たとえば、せみの鳴くのを「お母さんと呼んでいる」として、しばらく納得できるようにしても、しだいにそれでは都合の悪いことがでてくる。

そこで、現象を「説明」するための話は、なるべく人間の内的世界をかかわらせない方が、正確になることに人間がだんだん気がつきはじめた。そして、その傾向の最たるものとして、「自然科学」が生まれてくる。「ふしぎ」な現象を説明するとき、その現象を人間から切り離れたものとして観察し、そこに話をつくる。

このような「自然科学」の方法は、ニュートンが試みたように、「ふしぎ」の説明として普遍的な話（つまり、物理学の法則）を生み出してくる。これがどれほど強力であるかは、周知のとおり、現代のテクノロジーの発展がそれを示している。これがあまりに素晴らしいので、近代人は「神話」を嫌い、自然科学によって世界を見ることに心をつくしすぎた。これは外的現象の理解に大いに役立つ。しかし、<sup>⑥</sup>神話をまったく放棄すると、自分の心のなかのことや、自分と世界とのかかわりが無視されたことになる。せみの鳴き声を母を呼んでいるのだと言った坊やは、科学的説明としてはまちがっていたかも知れないが、そのときのその坊やの「世界」とのかかわりを示すものとして、最も適当な物語を見出したと言いうことができる。

ところで、すでに述べた赤づくしの服装の人に二度も出会った人が次に三度目に出会う。そして、「わかった。あれはCIA（注：米国の中央情報局）の人物が僕をつけ回しているのだ」と判断したとする。このような解釈は、自分の心の状態を表現するにはピッタリかも知れないが、外的事実の吟味をまったく怠っている。あるいは、内的事実と外的事実が取り違えられていると言える。このようなときは、妄想と言いうことになる。

このことは逆に考えると、精神病的な妄想と言えども、それを「異常」としてのみ見るのではなく、その人が世界と自分とのかわりを、何とか自分なりに納得しようとしたり、それを他人に伝えようとしたりする努力のあらわれとして見ることもできる。

自然科学と妄想との間に「物語」があると考えると、その特性がわかる。簡単に言うると、<sup>⑦</sup>自然科学は外的事実には、妄想は内的事実には極端に縛られた「物語」ということになる。

【問1】 A ～ D に当てはまる語を次の中からそれぞれ選び、(ア) ～ (オ) の記号で答えなさい。ただし、同じ記号を2度以上用いてはいけません。

- (ア) なかなか (イ) とうとう (ウ) だいたい (エ) あくまで (オ) せっかく

【問2】 ① 「人間というのは『ふしぎ』を『ふしぎ』のままでおいておけない」とありますが、どういうことですか。

次の中から最も適当なものを選び、(ア) ～ (エ) の記号で答えなさい。

- (ア) 不安を抱えている人は、「ふしぎ」なことから目をそむけて、自分の心を閉ざしていつてしまう、ということ。  
(イ) 人は知識や経験を積み重ねていくにつれて、「ふしぎ」だと思っていたこともそう感じなくなる、ということ。  
(ウ) 人は「ふしぎ」なことに出会ったとき、納得できるような自分なりの答えを見つけようとする、ということ。  
(エ) 「ふしぎ」にとらわれた人は、いつの間にか答えを追い求めること自体が目的になってしまふ、ということ。

【問3】 ② 「『ふしぎ』と人間が感じるのには実に素晴らしいことだと思われる」とありますが、なぜですか。次の中から最も

も適当なものを選び、(ア) ～ (エ) の記号で答えなさい。

- (ア) 今では「あたりまえ」として受け止められていることにも、多くの人が力を合わせて「ふしぎ」なことを「あたりまえ」にしてきた偉大な過程があったから。  
(イ) 「あたりまえ」を「ふしぎ」から区別して考えていくことによって、人類はそれまでになかった多くの科学的な発見を手に入れ、進歩することができたから。  
(ウ) 「ふしぎ」に心をとらわれ、その「ふしぎ」について「あたりまえ」に考え続けていくこと自体に大きな価値があると、これまでの歴史が証明しているから。  
(エ) 「あたりまえ」とされていることであっても、それを「ふしぎ」ととらえ、その「ふしぎ」について考え続けていくことが、大きな成果につながりうるから。

【問4】

③「この人は『嫌われ者』になってくる」とありますが、これに関する次の説明文を読み、a d に当てはまる語をそれぞれ選び、(ア)～(カ)の記号で答えなさい。ただし、同じ記号を2度以上用いてはいけません。

「釈迦牟尼」は、「人間が死ぬ」という「ふしぎ」について、持っているものを全て棄てて、a の中で努力し考え続けた結果、仏教を創始するに至りました。一方、「この人」も答えを求めて努力しますが、書物で見出せないと分かったと、周囲の人に答えをたずねるようになりました。しかし、ふつうの人は「人間が死ぬ」という「ふしぎ」にとりつかれていては、b の生活もままなりません。そもそも、自分で考え続けなければ、自分にとつての「ふしぎ」に、c な答えが出るはずがありません。自分の本来の仕事もせず、周囲の人を自分の「ふしぎ」に巻き込もうとする「この人」は、他の人のb をかき乱す迷惑な存在ともなってくるのです。

さらに言えば、「この人」は、「ふしぎ」に心をとらわれるなかで、この謎に興味のない他者にd とも思える態度をとるようにもなっていくのです。こうして、「この人」はますます「嫌われ者」となっていきます。「釈迦牟尼」が問題の答えを自分で追究し続けたのとは大きく違うのです。

- |  |  |
|--|--|
| <p>(ア) 曖昧<br/>(イ) 充分<br/>(ウ) 丁寧<br/>(エ) 傲慢<br/>(オ) 孤独<br/>(カ) 日常</p> | <p>(ア) 曖昧<br/>(イ) 充分<br/>(ウ) 丁寧<br/>(エ) 傲慢<br/>(オ) 孤独<br/>(カ) 日常</p> |
|--|--|

【問5】

④「おたにまさひろ君の詩」とありますが、これに関する次の説明文を読み、(1)～(3)について適当なものを選び、それぞれ記号で答えなさい。

六歳さいのまさひろ君は、米屋なのにパンを食べるお父さんに「ふしぎ」を感じているようです。大人であれば米屋であつてもパンを食べることは「あたりまえ」なことでしょうが、ここに「ふしぎ」を見出しているまさひろ君の感性は、

(ア) 常識的な考えにとられがちな大人をハッとさせます

(1)

(イ) ユニークで独創的な行為こういを嫌う大人をがっかりさせます

(ウ) わが子の成長を強く願う子煩悩こぼんのうな大人をホッとさせます

。いつもの生活の中で

(エ) 「ふしぎ」なことが「あたりまえ」だと感じ取れる

(2)

(オ) 「ふしぎ」だと感じたことを「ふしぎ」だと口にできる

(カ) 「あたりまえ」なことが「ふしぎ」の中に存在そんざいしている

子どもの感覚に寄り添より添そうことで、

(3)

(キ) かつて自分が体験した懐かしい風景が、まざまざと思い出されるのです

(ク) いつか出会はずの風景の中に、自分の未来の姿が映し出されるのです

(ケ) 大人の目にも、いつもの風景がいつもとは違った形で見えてくるのです

。

【問6】

——⑤「『お母さん、お母さんと言って、せみが呼んでいるんだね』と子どもが答える」とありますが、どういうことですか。最も適当なものを次の中から選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

(ア) この子どもは、せみがミンミン鳴く声を子どもが母親を呼んでいる声であるとたとえることで、物語における表現技法の一つである擬人法を実践的に習得した、ということ。

(イ) この子どもは、せみがミンミン鳴くという出来事に自分の気持ちや経験を重ね合わせることで、せみが鳴く理由についての自分なりの解釈を見つけ出している、ということ。

(ウ) この子どもは、せみがミンミン鳴く姿に自分の感情を重ね合わせるうちに、自身とせみとの境界線を失い一体化していくことでファンタジーを生み出している、ということ。

(エ) この子どもは、せみがミンミン鳴く理由について大人に知識を与えられるのではなく、自分なりの答えを導いていく中で、自ら成長していくきっかけをつかんだ、ということ。

【問7】

E

には、次の(ア)～(エ)の文が当てはまります。意味が通るように並べ替え、その順番を解答欄の指示にしたがって(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

(ア) 夜の闇を破って出現して来る太陽の姿を見たときの彼らの体験、その存在のなかに生じる感動、それらを表現するのには、太陽を黄金の馬車に乗った英雄として物語ることが、はるかにふさわしかったからである。

(イ) しかしそれと同時に、彼らは太陽を四頭立ての金の馬車に乗った英雄として、それを語った。

(ウ) 古代ギリシャの時代に、人々は太陽が熱をもった球体であることを知っていた。

(エ) これはどうしてだろう。

【問8】

——⑥「神話をまったく放棄すると、自分の心のなかのことや、自分と世界とのかかわりが無視されたことになる」とありますが、なぜだと考えられますか。最も適当なものを次の中から選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

(ア) 「神話」とは、自分たちを取り巻く世界に対して各人や各民族・部族が行う独自の解釈のあらわれであり、ものの見方や考え方の特徴が色濃く示されたものであるから。

(イ) 「神話」とは、人間にとつての根本的な「ふしぎ」について説明するものであり、時代的な制約にもかかわらず客観的な説明をしようという努力がみられるものだから。

(ウ) 「神話」の方法と「自然科学」で導かれる普遍的な説明とは、ともにあつてこそ効果的なものであり、一方だけでは自分がかかわる世界を説明することはできないから。

(エ) 「神話」とはちがつて、「自然科学」による科学技術の発展は著しく社会を変化させてしまうので、自分の心と向き合うだけの精神的な余裕を人々に与えないから。

【問9】

⑦「自然科学は外的事実まうじうに、妄想まうそうは内的事実きやくたんに極端しほに縛しばられた『物語』ということになる」とありますが、このことに関する次の説明文を読み、  に当てはまる言葉をそれぞれ選び、(ア)  (ケ) の記号で答えなさい。また、  には、「内的」・「外的」のいずれかが入ります。「内的」、「外的」としたとき、当てはまるものをそれぞれ選び、(A) もしくは (B) で答えなさい。

すべてが真っ赤な服装の「おじさん」とまったく別の場所かうぜんで偶然ぐうぜんに三日連続で出会ったとき、人はその奇抜きばつな服装の人物との度重たひかさなる出会いに驚おどろくことでしよう。そして、この「ふしぎ」な出会いの意味を読み解こうとするはずです。こうして導き出されたものが「物語」です。

赤い服装の人物との三度の遭遇そごくごうを、「CIAが自分をつけ回している」と説明するとき、自分がCIAに追われるような何かをした、という 事実でもない限り、これは「妄想」といえます。「妄想」とは、 に基づいた個人的な見解です。したがって、「妄想」は、その人の不安おそや恐れという 事実が極端に強く込められているのであり、その人なりの「物語」であるともいえるでしょう。

もし、個人の事情は取り払はらって、同じ人物と別の場所で偶然に三度出会う確率を考え、計算によってその答えを求めようとするなら、それは によるものといえます。これは、「ふしぎ」を説明するのに、個人の 事実を一切排除いっさいはらいしようとする態度です。ニュートンが発見した物理学の法則が、「万有引力」と呼ばれるように、その説明は を持っています。

近代における を目にした人々は、「自然科学」の知に対して絶対的な信頼しんたいを寄せてきました。しかし、そのような態度によっては、 が軽視されることになる、と筆者は指摘してきしています。人には、それぞれの 事実じじつに根ざしたものの見方があるのです。「自然科学」によって切り捨てられがちな「物語」に注目し、自分の心のありようの重要性について改めて考えてみるのも良いのではないのでしょうか。

- (ア) 普遍的な性格
- (イ) 関係性の希薄さきはくさ
- (ウ) 根拠のない判断こんきよのない はんぱん
- (エ) 追究していく責任
- (オ) テクノロジーの発展
- (カ) 安心できる平和な世界
- (キ) 「自然科学」的な発想
- (ク) 「神話」を解釈すること
- (ケ) 世界と自分とのかかわり

【出典】

- I 長嶋有『猛スピードで母は』(文春文庫、二〇〇九年) 一四四頁～一六〇頁
- II 河合隼雄『物語とふしぎ』(岩波書店、二〇一三年) 一頁～一〇頁

